

学生ぶるとは、

93歳、夢とあこがれを語る

ふと我にかえると、現実は無機物に囲い込まれた荒涼たる世界を、愛に飢えた人影がバラバラに生きている。そういう風景が幻のように見えるのです。私はその現実の中に垣間見えるかすかな光への道を手さぐりで求めようと思いました。それは夢のようなもの、あこがれにすぎないのかもしれませんが。でも、そのあこがれ、夢なしには私にはどう生きるかの手がかりを見出すことはできないのです。その手がかりを見つけるために、私は自然から預かった生命という摩訶不思議なものに注目してみました。

(大田堯著「かすかな光へと歩む」より)



題名の「かすかな光へ」は谷川俊太郎の同名の詩から名づけられた。また、この詩の朗読は詩人自ら行っている。

ちがっているということに生命の特徴がある、関わりの中に生命がある—など、すばらしい言葉があつてハッとさせられる。それが学習・教育だと思った。若者にも、高齢者にも観てほしい作品である。
—小山内美江子 (脚本家)

文明や経済に気をとられることなく、人間の正体を見つめ直すことから、教育をはじめなければならない。それをいま痛感する。
—ジェームス三木 (脚本家)

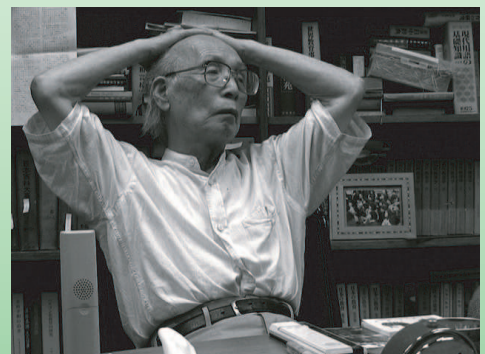
学校の教師や子を持つ親、そのすべてのの人たちに見てほしい映画です。
—山田洋次 (映画監督)

あの3.11後の日本だからこそ、この映画は特に私たち庶民の心に光を灯してくれます。原発事故の後だからこそ、なにが一番大事なのかを気づかせてくれます。思わずすべての他者に「ありがとう」と言いたくなるような、そんな映画です。(コメント抜粋) —松元ヒロ (コメディアン)

「違っていいんだよ」じゃなく「違う」んです

<大田堯プロフィール>

教育研究者。東京大学名誉教授、都留文科大学名誉教授。日本子どもを守る会名誉会長。東京帝国大学文学部卒業。東京大学教育学部教授、日本子どもを守る会会長、都留文科大学学長、日本教育学会会長などを歴任。専攻は教育史、教育哲学。93歳の現在も、講演や執筆にエネルギーギッシュに取り組んでいる。広島県出身。



エデュケーション=教育は誤訳じゃないかと思ってるんです

教育って自分が学んだ何か難しいことを伝えることかと思っていました。この映画を観て、教育観が変わりました。子どもの伸びようとする力を援助すること。全くそうですね。援助することができなくても、伸びようとする力を自分の価値観を押しつけることで妨げないようにしていきたいです。心に残る言葉が沢山ありました。でも“〇〇しなくてはいけない”などの押し付けが全くない。見る側の人権を大切にしてくださる優しい映画でした。(20代・女・学生)

「違っていいんだよ」ではなくて「違う」。このことばで人間ひとりひとりの人権や生命を守っているんだと感じました。今後も教育とは何かを考えていきたいと思うきっかけにもなりました。(20代・男・学生)

3.11以降主権者としてどう生きていくのか、自問する日々です。その中で、今日映画を観ることができて良かったです。谷川さんの詩と子どもの表情がとても印象的でした。(50代・女・会社員)